

令和6年度
入学試験問題

第3回

国語

- 1 問題用紙は監督者かんとくしゃの指示があるまでは開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点くとうてんや符号ふごうは一字として数えるものとします。
- 5 問題は1ページから15ページまであります。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

森村学園中等部

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

イヌやネコなどに対して、現代の人間の場合は、初対面の人に威嚇や攻撃など敵対的な行動をすることはまずありません。小さな子どもでもうしであればありえるかもしれませんが、普通の大人であれば、失礼のない程度に愛想よくするのではないのでしょうか。

どのくらい愛想よくするかは、「その人とまた会うかどうか」も重要なポイントになっているように思います。たとえば、近所に住んでいる人や、学校の同級生、あるいは会社の同僚など毎日のように顔を合わせる人であれば、敵対していてもいいことは何もありません。もし敵対していたら、顔を合わせるたびに嫌な気分になってしまいますし、困ったときに助けられないかもしれません。多くの人は、頻繁に会う人たちとはできるだけ仲良くするように、少なくとも険悪な関係にならないように努力するのではないかと思います。

それでは近所の人ではなく、旅先でたまたま出会った人であればどうでしょうか。たとえ険悪な雰囲気になつたとしても二度と会うことはありません。失礼のない程度の付き合いはするにしても、良好な関係を築く必要性は感じないのではないのでしょうか。

① このように、今後もつきあう可能性がある人とならない人で態度を変えることは、いたって合理的です。この傾向は「進化ゲーム理論」という理論的な研究でも確かめられています。同じ個体と長く付き合い合えば付き合い合うほど、協調的な行動が有利に働くことから、付き合いの長さが安定な協力関係を生み出すひとつの要因になることが分かっています。

そして付き合いの長さに大きく影響を与えるのは寿命の長さです。寿命の長い生物どうしは生涯でまた出会う可能性が高まります。人間は長生きで成長に時間のかかる生物です。これは少産少死の戦略によるものです。その結果として同じ他人と長く付き合い合うことになり、敵対したり無視したりするよりも仲良くなつて協力し合うほうがお互いの生存に有利になっています。こうして人間の場合は、血縁関係にない個体との協力関係が発展してきたと考えられています。

現在の人間たちの協力の最たるものは「職業」です。多くの人は職を持っていて、特定の仕事をすることで生きていけるようになっていきます。私の場合であれば大学教員ですので、大学で講義をしたり、研究をしているだけで給料をもらって、衣食住を賄うことができます。私自身に着けている衣服も毎日食べている食料も、住んでいる家も、自分で作ったものではありません。作ろうと思っても質の高いものは作ることができません。その代わりに他のもつと技術のある人間が仕事として作ってくれたものを買っています。

② 現代人には当たり前すぎて普段はあまり意識しないかもしれませんが、これは大きな協力関係です。皆が自分以外の誰かのために質の高い仕事をするので、全員が安全で快適な生活を送ることができています。

職業という協力関係の重要さは、誰かが仕事を辞めたらどうなるかを考えるとすぐにわかります。たとえば、衣服を作る仕事の人全員辞めてしまったら、みんな自分の服は自分で作らないといけなくなります。きっと粗末な衣服しか作れないことでしょう。忙しい人は全く作れ

ないかもしれません。着替えを用意しておくのも大変ですし、洗っているうちにぼろになるでしょうから、洗濯もあまりしなくなるでしょう。衣服は汚れ、感染症も広まりやすくなるかもしれません。現代人が安く品質の高い衣服を手に入れることができているのは、作ることに特化した人が専門に作ってくれるおかげです。

そしてそれは一方的な関係ではありません。衣服を作る人も食料や住居は別の専門家に作ってもらっています。私たち人間は、現在、社会という大きな協力関係の網の目の中に組み込まれています。

「社会の中に組み込まれる」ということは「社会の歯車になる」ということです。この言葉にはあまりいい印象はないかもしれませんが、自分の個性とかアイデンティティがおびやかされていると感じるかもしれません。しかしそれは誤解だと私は思います。むしろ社会の歯車になることでほとんどの人は個性を発揮して、みんなの役に立てるのだと思います。

I、社会が全く存在しない状況を考えてみましょう。父親、母親、小さい子どもの3人家族だけで無人島で暮らしているような状況です。この場合、生きていくために必要な仕事はすべて3人だけで分担しないといけません。狩りをするのは、生物的に力の強い大人の男性である父親になるでしょう。植物や果物を採集したり、調理したりするのは、狩りに不向きな女性や子どもの仕事になるでしょう。たとえ、狩りなんて荒っぽいことが嫌いな男性や、採集よりも狩りの方が好きな女性だったとしても、餓えないためには身体的に向いている方をやらざるをえません。狩りに失敗したり、食べ物を見つけないことに失敗したりすれば、すぐに命の危機が訪れます。また、この世界では、勉強が得意とか、絵をかくのが得意とか、コミュニケーション能力が高いとか低いなどの個性が役に立つことはありません。なにより必要なのは、獲物をしとめたり、食料を確保する能力です。力や体力が何よりも重要です。強く丈夫で健康な人間だけが生き残る世界です。それ以外の個性には出番はありません。

一方で私たちの社会は違います。力や体力が必要な職業もあれば、勉強や絵を描くことやコミュニケーション能力が必要な職業もあります。どれか1つの能力が優れていれば、十分に活躍の場が見つかります。少なくとも狩猟採集社会よりは、今の社会の方が自分に合った役割（歯車）が見つかる可能性が高いように思います。

こうした他人との協力からなる社会を形成するようになると、人間という生物が増える単位も変わってきます。人間以前の生き物は自分の力で自分だけを増やしていました。細菌も線虫もカエルも虫もサルも、増えることができるかどうかは自分の能力や運によって決まっています。優れた能力を持っていけば生殖に成功し、子孫を作ることができますし、そうでなければ血統は途絶えてしまいます。

II 協力関係の網の目の中にいる人間は違います。自分が生き残って増えるためには他の人の能力も重要です。また自分の能力もほかの人が生き残って増えることに貢献しています。自分の命が大事なのと同じように、他の人の命も大事になっていきます。増える単位が自分の体を超えて広がっているととってもいいかもしれません。

このような大規模な協力関係は人間ならではの特徴です。人間以外の生物が非血縁個体と協力することは、特殊なケースを除いてほとんどありません。なぜ人間のみでこのような特殊な能力が生まれたのかについてはいろいろな説があります。人間の持つ高度な言語能力や認知能力や寿命の長さが大事だったと言われています。また、それらの能力が生まれた背景には、狩猟採集生活の中で協力する必要性があったことや、子どもが成長するまでに時間がかかることから子育てに他の個体の協力が必要だったことなどが指摘されています。

このような性質のどれが直接的な原因だったのかはわかりませんが、いずれにせよ、このような他の個体との協力を可能とする人間の性質は、元をたどれば少産少死の戦略によってもたらされたものです。命を大事にして長く生きるようになり、他個体と付き合うことが可能になったために協力することが有利になりました。

Ⅲ、人間には他者を認識する知能や、他者の気持ちを察することのできる共感能力も備わっています。結果として協力関係がどんどん発展していきました。私たちは地球上の他のどんな生物よりも協力的な、いわば「やさしい」生物です。このようなやさしさの進化は少産少死の戦略を極めてきた生物にとって必然だったように思えます。

現在の人間は他人と協力することでより生き残りやすく増えやすくなっています。この他者と協力をする効果は圧倒的です。地球上の人口が2022年現在約80億人に達し、このまま進めば110億人くらいに落ち着くと予想されています。

(中略)

ただ、この他者との協力には弊害もあります。協力関係が増えることに対してきわめて有効であったために、人間はもはや他者の協力なしでは生きていけなくなってしまうています。(中略)

私たちは自分を含む多くの人との共同作業によって、効率的で快適な社会に住むことができています。ほとんどの人はこの社会を捨てて自給自足の生活に戻ることは望んでいないでしょう。そもそも、自給自足の生活にもどったら今の人口はもう維持できません。たとえば、1万年前までの人類は狩猟採集生活を送っていましたが、この生活スタイルでは地球上でせいぜい500万人程度しか維持できなかったようです。もし、今の社会を捨てて狩猟採集社会に戻るとすると、現在生きている約80億人のほとんどはすぐに死んでしまうことになります。多くの人にとってこれは耐えられることではないでしょう。

したがって、私たちが現代の高度な協力関係で結ばれた社会を維持することは、もはや義務になっていきます。これは協力することで増えてきた人間という生物にとっては当然の結果です。私たちは協力しないと、今の人口も快適な生活も維持することはできません。協力することが増えることに貢献すればするほど、協力を善いものとみなし、他人にもそれを強いる性質が子孫の中で強化されていきます。そして私たちはますます協力するような性質と倫理観を持つようになってしまっています。人間が協力関係を増やすことによって大成したことが、現代人の抱える他者との関わりの悩みを生み出しています。

(市橋伯一『増えるものたちの進化生物学』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

(注) * 険悪……………状況・雰囲気などが悪化して油断ができないこと。

* 合理的……………道理や理屈にかなっているさま。

* 賄う……………限られた人員・物資・費用などで何とか用を足す。

* アイデンティティ……………ある人や組織がもっている、他者から区別される独自の性質や特徴。

* 貢献……………ある物事や社会のために役立つように力を尽くすこと。

* 弊害……………他のものに対する悪い影響。

* 倫理観……………行動の規範としての道徳観や善悪の基準。

問一 ————— ① 「今後もつきあう可能性がある人とな人で態度を変える」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「今後もつきあう可能性がある人」に対して、人はどのような態度をとるのですか。それを述べた三十五字以上四十字以内の部分を

————— ①より前の本文中に求め、最初と最後の五字をぬき出しなさい。

(2) 人によって「態度を変える」ことについて、筆者はどのように考えていますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 今後のことを考えて態度を変えるのは、人間がネコやイヌよりも高い知能を身につけてきた結果だと考えている。
- イ 二度とつきあう可能性のない人だからといって急に態度を変えるのは、本当は好ましくないことだと考えている。
- ウ 今後のつきあいの可能性に応じて態度を変えるのは、寿命の長い人間の利害に即した当然の行動だと考えている。
- エ 相手によって態度を変えるのは、今後も良好な人間関係を築いていくためには仕方のないことだと考えている。

問二 ————②「現代人には当たり前すぎて普段はあまり意識しないかもしれませんが、現代人が当たり前すぎて意識しない

のは、どのようなことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 現代では多くの人が職を持ち、仕事によって得た給料で衣食住を賄っていること。

イ 現代人の生活を支える衣服や食料や家の多くは自分自身で作ったものではないこと。

ウ 現代人の多くが自分の代わりに他の人が作ってくれたものを買っていること。

エ 現代では皆が誰かのために仕事をするので全員の生活が成り立っていること。

問三 ————③「この言葉にはあまりいい印象はないかもしれませんが、筆者がこのように述べるのはなぜですか。その理由

として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「歯車」は、機械の中で常に動き回っている部品であり、ゆとりを失った現代人の多忙さをイメージさせるから。

イ 「歯車」は、機械を構成する無数の部品の一つにすぎず、いつでも誰とでも交換可能なものをイメージさせるから。

ウ 「歯車」は、機械を正確に動かすうえで欠かせない精密な部品であり、非人間的な冷たさをイメージさせるから。

エ 「歯車」は、たった一個では何の役にも立たない部品にすぎず、使い道のない無価値なものをイメージさせるから。

問四 ————Ⅰ Ⅲ に当てはまる語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア ところが イ たとえば ウ しかも エ つまり オ だから

問五 ————④「やさしさの進化」とありますが、人間だけがそのように進化したのはなぜですか。その理由として適当でないものを次

ら一つ選び、記号で答えなさい。

ア 寿命の長い人間にとっては、ほかの個体と敵対するよりも協力するほうが生存に有利であったから。

イ 他の生物は他の個体の気持ちに分からないが、人間には他者の気持ちを察する共感能力が備わっていたから。

ウ 他の生物は自分だけの力で数を増やしてきたが、人間は自分が増えることに他人の存在が役立っているから。

エ 人間は狩猟採集社会の中で他の生物の命を奪って生きてきたが、その経験から命の大事さを学んできたから。

問六 ————⑤「この他者との協力には弊害もあります」とありますが、ここで述べられている「弊害」はどのようなことですか。七十字

以上八十字以内で答えなさい。

問七 次の会話文では、本文を読んだ家族がそれぞれの悩みを語っています。本文における現代人の抱える悩みの内容と合致するものとして

最も適当なものを次から選び、発言者の名前を答えなさい。

母 本文にもあるように現代社会は昔に比べれば暮らしやすくなったと思うけれど、みんなも本文にあるような「人間関係の

悩み」を感じたことはある？

アスカさん 私は小学校の休み時間が嫌なんだ。今年の学級会で「休み時間にはみんなで一緒に遊ぼう」というルールが決まったから、毎日クラス全員でドッジボールをしているの。私は本当は教室で本が読みたいのに、それをすると自分勝手だと思われるちゃう。

カイトさん ぼくは高校で部活動で仲間との関係がうまくいっていないんだ。ぼくは部長なだけけれど、チームのためを思って伝えてきた仲間のプレーへの指摘が、みんなにとっては偉そうに聞こえるらしいんだ。少し言い方がきつかったのかなあと反省はしているんだけど、伝えるべきことだから難しいんだよね。

トモミさん 私はアルバイト先での先輩との関係に悩んでいるの。最近飲食店でアルバイトを始めたんだけど、そこで親切に仕事を教えてくれた先輩に連絡先を教えたら、頻繁に連絡が来るの。正直なところ返事をするのが面倒なのだけど、無視したら仕事に支障が出てしまいそうで返事を続けているの。

ミドリさん 私は社会人になるのをきっかけに上京したんだけど、東京での暮らしが味気なくて苦しいんだ。東京には人がたくさんいるんだから出会いもあるだろうと思ったけれど、みんなお互いに関わろうとしないから友達も全然増えなくて、さびしい毎日を送ってるんだ。

問八 この文章の表現の特徴として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 重要な語句にかきかっこをつけることで、本文の主題を浮かび上がらせるよう工夫している。

イ 具体例を多く用いることで根拠を示し、自分の考えや主張に説得力を持たせている。

ウ 自分の意見を断定的に表現することで、その他の意見を排除する効果をねらっている。

エ 自分の意見はほとんど交えずに、科学的に証明された事実に基づいて客観的に述べている。

【二】 次の文章は、戸村飯店という中華料理店の兄弟である兄「ヘイスケ」と弟「コウスケ」をめぐる物語である。兄は戸村飯店を継がずに、小説家を目指して上京しようとしている。【文章Ⅰ】は、弟の視点から書かれており、兄が戸村飯店を出ていく間際の場面である。【文章Ⅱ】は、兄の視点から書かれており、兄が幼少時代の思い出を回想している場面である。二つの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

兄貴と仲が良かったのはいつまでだろう。そもそも仲が良かったときなんてあったのだろうか。俺は、自分の机の上を片付けている兄貴をぼんやり眺めた。廃品回収にでも出すのだろうか。

教科書や参考書をどンドン紐で結んでいる。兄貴は物を捨てるのが平気だ。手当たり次第になんでも片していく。卒業まであと二日。三日後には兄貴が出て行く。だけど、兄貴が出て行くことを寂しいとはまるで思えなかった。

(中略) 俺は兄貴の動きを目で追いながら、少しまじめに兄貴のことを考えてみた。しかし、兄貴がどんな人間なのか、何が好きで何に興味を持っているのか、情けないくらい浮かばなかった。愛想を振ることが上手で外面がいい。不器用なふりをして、小説家を目指しているふりをして、この店から出て行こうとしている。それはわかる。でも、本当の兄貴がどんな人間なのか、知らなかった。ひとつしか年が離れていない兄弟なのに、兄貴のことを理解できない。こんな狭苦しい部屋で一緒に暮らしているけど、会話しにくい会話なんてほとんどしない。大きな喧嘩をしたわけではないのに、いつからか必要最低限の言葉しか交わさなくなっていた。

「お前はなんで東京行く?」

俺はぼそりと兄貴に向かって言った。

「は?」

突然声をかけられた兄貴が、I 顔をこっちへ向けた。

「お前、なんで東京に行くんや?」

「何を今更。小説家になるからやって言うてるやん」

「うそつけ」

「ほんまや」

「小説なんか書いてどうする? 意味あるんか?」

「意味は大ありや。ペンは剣より強いんやで」

兄貴はおどけて言った。人を見くびったように軽口をたたき。俺は兄貴のそういうところが昔から嫌いだった。

「あほちゃうか。ペンなんかでなんもでけへんわ」

「ほんまお前は無知やなあ。言葉で人を幸せにすることも、人を殺すこともできるんやで。しかし、そう思ったらボールペン作った人はノーベル賞もんやな」

あほらしい。兄貴の言うことは、いつも口先だけのでまかせだ。

「ボールペンが剣に勝てるわけないやろ？ 文章で誰かだれをじわじわ傷つけることはできるかもしれんけど、殺すことなんかでけへん。そやけど、包丁なら一発でやれる。大切なものを守るためには、ペンではどうしようもない。お前の言うことはいつも非現実的や」

「なんや、コウスケは大切なものを守るために包丁を持つてんの？ この二十一世紀に？ ニラ切るためやなかつてんな。こりやまた物騒ぶつそうや」
兄貴がへらへらと言った。

「料理をあほにすんな。ペンではおなかいっぱいにならへんけど、包丁でニラ切つとつたら、とりあえずおなかは膨ふくらすことができるわ。腹の足しにならん文章書くより、餃子ぎょうざやチャーハン作るほうがよっぽどえらいんや」

俺の言葉に兄貴は「なるほど」と、大きくうなずいてから、

「親父も同じこと言うと言ったわ。やっぱ、戸村飯店はお前が継ぐべきやな。思想まで同じやねんから」
と言った。

① 俺の頭の中がカチンとなった。

こうなった今、俺が店を継ぐのは仕方がないことだと思ってる。いや、もっと前から店を継ぐのは兄貴ではなく俺だと感じていた。けど、家を勝手に出て行く兄貴にそんなことを決め付けられたくはなかった。

「ほんまは先に生まれた奴やつが責任持たなあかんのちゃうんか？」

「先に生まれた奴？」

「お前に決まっとるわ。なんでお前はなんもしようとせんのか？」

俺の語気は強くなった。今までずっともやもや思っていたことが、初めて言葉になって出てきた。

どちらが家を継ぐのかなんて話を、俺と兄貴はしたことがなかった。自分たちの店について一度も話したことがない。それなのに、店を継ぐのはいつの間にか俺という流れになっていた。店を継ぐことは悪いことではない。それでいいと俺も覚悟かくごをしている。だけど、完全に納得できているわけではない。どこかで釈然しやくぜんとしないものがある。

「別になんもせんことはない。お前が知らんだけで、俺かって見えへんところていろいろ責任取ってるんやで」

「はあ？ あほ言うな。責任取ってる奴が、家出て行くわけないやろ」

「先に出て行けるのって長男の特権やん。一つくらいの特権あらへんと、長男なんかやってられへん」
何一つ長男らしいことをしてこなかった兄貴が言った。

「そやったら、次男の特権はどこにあるねん」
持ち物は兄貴のお下がり。ひとつしか年が変わらないのにえらそうに言われる。その上面倒めんどうなことまで押し付けられて、次男は損なことばかりだ。

「なんでや。大きな特権があるやん。先を見て学べる。それこそが次男の特権や」

「お前見て学ぶことなんか、一つもあらへんわ」

「俺が成功したらまねしたらええし、俺が失敗したら違ちがうやり方をしたらええ。なんとも楽チンやん。ほんまコウスケがうらやましいわ。俺も兄貴がほしいねえ」

「ほけたれ！」

俺は手近にあったジャンプを思い切り兄貴の頭に投げつけた。至近距離しきんきょりから投げただけあって、ジャンプは兄貴の頭の真ん中に命中しゴンという鈍にぶい音を立てた。

兄貴は「いて」と声を上げたきり、反撃はんげきすることもなく黙だまり込んでしまった。よっぽど痛かったのか、うつむいたきり動かない。気にはなったが、俺は素知らぬ顔をして自分の机の前に座った。自業自得だ。少しは痛い思いをすればいい。俺が意味aもなく机の上を片付けていると、ようやく兄貴が顔を上げた。

「俺ってやっぱ勝手なんかな」

兄貴はぼそりと言うと、よろよろとジャンプを拾い上げて俺の机の上に置いた。

「何がや」

②「長男やのに、面倒せりふなことお前に押し付けて、ここ出て行くなんてさ」
兄貴らしくもない台詞。

「そやったら、やめとけよ」

俺は鼻で笑ってから、そう言ってやった。

「お前、本当のところはどうなん？」

兄貴は俺の言葉には答えず、そう訊きいた。

「何が？」

「この店継ぐの、どう思ってる？」

「別に、どうも思っへんわ」

「どうも思っへんことないやろう？ このまま家にいて、親父のあとを継ぐのって嫌やとか、やっぱり継ぎたいとかあるやろう？」

「さあな」

「さあなって、どやねん」

「そりゃ、兄貴みたいに勝手気ままにできればええけど、普通の神経じゃ、親父の店つぶせへんやろ？」

「そっか。そやな」

兄貴がⅡ顔になった。こんな神妙な兄貴を見ることはめつたにない。頭の打ち所が悪かったのだろうか。不思議そうに俺が顔を眺めていると、兄貴は、

「ま、普通の神経やないから、俺って小説家になれるんやな」
と、にやりと笑った。

【文章Ⅱ】

⑦ 小学校一年生のとき、親父が俺とコウスケに包丁を持たせたことがあった。

「二人とも、厨房に來い」

親父にそう言われたとき、「ついにこのときが来た」と、俺はぞくつとした。親父に試される日が来たのだ。物心ついたときから俺は器用だった。それはお袋も親父も認めていて、ヘイスケは何をさせてもうまくこなすと言われていたし、指先だけは父ちゃんに似ているとも言われていた。

小さいながらに、「期待にこたえたい」そう思った。親父にいいところを見せたい。少なくともコウスケに負けてはいけない。コウスケはやんちゃで粗雑でいい加減な奴だった。やることは早いけど、ミスも多い。包丁を持つなんてとんでもない。

親父は俺とコウスケに包丁を渡した。①俺に渡されたのは、親父が使い込んでいる包丁だった。俺は手が震えた。想像してたよりずっと包丁は重かった。あのですしりした感触はいまだに手のひらに残っている。何年もたった今でも、初めてのことをするときはそのときの景色が必ず浮かぶ。

② コウスケはなんの迷いもなく包丁を動かし、でたらめにジャガイモを切り始めた。後れを取っちゃいけない。大丈夫だ。俺はふうつと息を吐いた。なかなか震えが止まらないのに、慌てて包丁を動かそうとしたのがまずかった。ジャガイモに刃を当てたとたん、俺は手を滑らして、指先を切った。ジャガイモに赤い血が流れた。切り傷は深く、血はどくどくと止まらなかつた。お袋がすぐに救急箱を取りに行った。

③ コウスケは機嫌良くジャガイモを刻んでいた。ジャガイモは見るも無残な姿になったけど、親父は笑いながら、

「ほんまにお前はできんやつや」
と、コウスケの頭を叩いた。

俺はお袋に指を手当てされながら、その様子をただ見ていた。親父は俺には何も言わなかった。

もう一度、チャンスはあった。俺はひそかに練習をした。親父は俺に期待しているのだ。コウスケではない、兄貴である俺にだ。今度はミスは許されない。親父は失敗を叱りはしないけど、何度も同じことを繰り返すのは嫌う。親父の前以外では包丁は持たせてもらえなかったから、俺はカッターで消しゴムを切って何度も練習した。

二度目、前と同じように親父は包丁とジャガイモを俺たちに渡した。俺に渡されたのは、前と同じ親父が使い込んでいる包丁。やっぱりずつしりと重い。今度は焦らず、俺はコウスケの動きをじつと見た。ゆつくりさえやれば、ジャガイモを切るのは難しいことではない。コウスケは前と変わらず、でたらめにジャガイモを切った。一度目と比べると変わっていない。何一つ上達していない。ご陽気に皮をむき終え、「アチョー」とわけのわからない奇声を上げながら、ジャガイモをみじん切りにした。親父は、「食い物で遊ぶな」と、コウスケを殴った。でも、その顔には笑みが漏れていた。

「ほら、ヘイスケも切ってみろ」

俺は小さくうなずいて、包丁を構えた。今度は大丈夫だ。何度も何度も練習したのだ。俺はそう言い聞かせてから、包丁を動かした。ところが、結果は同じだった。また失敗をしたのだ。手が滑って、指先を切った。包丁がジャガイモの上を滑り、勢いが余って左の親指を切った。ジャガイモは消しゴムみたいに四角じゃないし、包丁はカッターみたいに小さくなかった。

それでも前回より上達していたのか、切り口は小さく血は少ししか出なかった。でも、目からは涙がぼろぼろ出た。

「大げさなやつや。そんなに嫌ならやらんでええ」

短気な親父はそう言った。泣いているのは、嫌だからじゃない。痛いからじゃない。そう言おうとしたけど、何も言えなかった。

「兄ちゃん泣くなやあ。にんじんが笑つとるど」

コウスケは包丁を持つのを面白がって、ジャガイモだけじゃなく、にんじんやキャベツも切って見せた。親父もお袋もそんなコウスケに好意の目を向けていた。

それ以来、俺は戸村飯店の厨房には入っていない。

(瀬尾まいこ『戸村飯店 青春100連発』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

(注) *ジャンプ……集英社から発売されているマンガ雑誌『週刊少年ジャンプ』のこと。

*粗雑……いいかげんで大ざっぱなこと。

問一

I · II にはそれぞれ、登場人物の表情を表す言葉が入ります。それぞれに入る表現として最も適当なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

I
 ア 不愉快ふゆがいな イ 得意げていぎな ウ 怪訝けげんな エ 不安ふあんな

II

ア にんまりした イ ほっとした ウ びっくりした エ しんみりした

問二

①「俺おれの頭かぶの中なかがカチンかちんとなった」とありますが、ここから読み取れる弟「コウスケ」の心情として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 兄あにが、自分と父親を同じような性格だと一方的に決めつけることに対して、腹立たしさを感じている。

イ 兄あにが、戸村飯店を継つぐのは自分であることを勝手に決めているように感じられ、不快感をおぼえている。

ウ 兄あにが、自分の話に大きくうなずき、それをじっくり聞いたように見せたため、驚おどろきを隠かくせないでいる。

エ 兄あにが、戸村飯店についての自分の真剣しんけんな話をふざけながら聞いていることを受けて、悲しさに沈しずんでいる。

問三

②「兄貴せりふらしくもない台詞せりふ」とありますが、弟「コウスケ」は兄「ヘイスケ」のことをどのような人物だととらえていますか。そのことについて説明した文として適当あてあでないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 面倒めんどうなことを弟に押しつけ、自分では何もやろうとしない無責任な人物

イ 人当たりがよく、どんな人に対しても誠実に振ふる舞まう律儀りちぎな人物

ウ 自分を都合よく装まって、家から出ていこうとする抜け目ぬめのない人物

エ いつも口先だけの発言をして、本心では何を考えているのかわからない人物

問四

——③「俺はぞくつとした」とありますが、この時の兄「ヘイスケ」の心情の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が料理人としての見込みがあるのかを父に試されるときがきたと緊張するとともに、父からの期待に応えたいと意気込んでいる。

イ 自分の器用さを父に見せるときがきたと張り切る一方で、いい加減であるのに父から気に入られている弟に勝てるのだろうかと思安になっっている。

ウ 自分と弟のどちらが店を継ぐのかを決める時がきたと身構えるとともに、すでに自分が父親から十分に信頼されているのだと心躍らせている。

エ 自分と弟が父親の店を手伝う時がきたと張り切る一方で、はたしてうまく包丁を扱うことができるのか、という失敗への恐怖を感じている。

問五

——④「親父は俺に期待しているのだ。コウスケではない、兄貴である俺にだ」とありますが、本文中の~~~~~⑦から⑤の「親父」の振る舞いのうち、弟ではなく兄「ヘイスケ」に期待していることが分かるものはどれですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

⑦ 「二人とも、厨房に來い」親父にそう言われた

イ 俺に渡されたのは、親父が使い込んでいる包丁だった

ウ 「ほんまにお前はできんやつや」と、コウスケの頭を叩いた

エ 「大げさなやつや。そんなに嫌ならやらんでええ」短気な親父はそう言った

問六

——⑤「目からは涙がぼろぼろ出た」とありますが、これはなぜですか。兄「ヘイスケ」の戸村飯店に対する思いをふまえて、五十字以上六十字以内で書きなさい。

問七

——aから——dのそれぞれの部分の読み取りとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア【文章Ⅰ】——a「意味もなく机の上を片付けている」という部分からは、表面上では兄のことを心配していないように振る舞いながら、内心では兄のことを気にかける弟の心情が読み取れる。

イ【文章Ⅱ】——b「なんの迷いもなく包丁を動かす」という部分からは、戸村飯店を継ぐ自覚を持って失敗を恐れずに料理に臨もうとする弟の姿が読み取れる。

ウ【文章Ⅱ】——c「親父は俺には何も言わなかった」という部分からは、店を継がせようとしていた兄への期待が外れ、言葉が見つからない父親の姿が読み取れる。

エ【文章Ⅱ】——d「コウスケを殴った」という部分からは、弟の厨房でのやんちゃな行動を怒り、厨房では職人気質な一面を見せる父親の姿が読み取れる。

問八

【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読み比べたときの説明として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア【文章Ⅰ】で、兄「ヘイスケ」はうわべだけの発言ばかりをする無責任な人物のように描かれているが、【文章Ⅱ】では、兄の言葉には常に弟の将来を案じるメッセージが込められていたことが明らかになる。

イ【文章Ⅰ】では、弟「コウスケ」が次男という立場に不満を持っているかのように描かれているが、【文章Ⅱ】では、無自覚ながらも次男らしく無邪気に振る舞い両親にも可愛がられていた様子が描かれている。

ウ【文章Ⅰ】で、兄「ヘイスケ」は店を継がないことに迷いがなくかのように描かれているが、【文章Ⅱ】では気が進まないながらも戸村飯店を継ぐことで長男として責任を持つようとしていることが示されている。

エ【文章Ⅰ】では、弟「コウスケ」は戸村飯店の将来を冷静に考える成熟した男性として描かれているが、【文章Ⅱ】では、実は幼少期には包丁を持つことさえ危なっかしい人物だったことが明かされている。

次の①～⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨～⑫の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① 公平にサバく。
- ② 事故の原因をスイソクする
- ③ 汽車がケイテキを鳴らす。
- ④ 物事をヒハンの的に見る。
- ⑤ 子どもの日のおイワイ。
- ⑥ 公園のテツボウにぶらさがる。
- ⑦ カイシンの出来を喜ぶ。
- ⑧ センリの道も一歩から。
- ⑨ この曲を聞くと感傷的になる。
- ⑩ 象が水を浴びる。
- ⑪ 君の本音を聞かせてほしい。
- ⑫ ことばの由来や語源を調べる。